

に強く働きかけている部分を、適当に編成することによって、非行傾向児の早期発見のための効率の良い検査が作成されはしないか、この研究もあわせて行なうことを目的として、昭和33年度に3カ年計画で着手した。

第1年度は、家庭環境診断テスト、基本的欲求検査、性格指導表、クレペリン・内田作業素質検査を。第2年度は、牛島義友著の性格検査、問題行動診断テスト、診断性向性検査、道徳診断検査とについて、第1の目的に沿った研究を進めてきた。その方法は、各検査を構成する下位検査または問いに、①非行への働きかけの程度により順位をつけること、②問いの反応を数量化して非行を予測することであった。

それがため非行または非行の傾向を帯びつつある者の一群と、正常な者の一群とを設け、これに前記各種の検査を実施した。①に対しては、ラザースフェルドの潜在構造分析を、②では、グリユック夫妻が犯罪予測に用いた数量化と、林博士が仮釈放の予測の際に用いた数量化によった。

順位づけおよび数量化は、共にまず非行群と正常群との間で、問いに対する反応に有意の差の認められたものを検出することで、これには $\chi^2$ -検定を用いた。これはまた第2目的である、非行傾向児の発見を唯一のねらいとする性格検査問題作成の第1段階を行なったことにもなる。

#### b 研究の目的

非行傾向児の早期発見を唯一の目的とする性格検査の作成は、先の“研究の経緯”に記したごとく、3カ年計画をもって着手した。非行傾向児の早期発見に関する研究の一つの分節である。

ここで作成しようとする性格検査は、検査がねらいとする諸特性について被害者を浮彫りにし、そこから生活指導の手がかりを捉えさせようとするのではなく、被検査の非行への可能性を確率的に示そうとするのである。すなわち検査を構成する問いに、非行への統計的な関連度に応じた数量を与え、これの総和に伴う非行への可能性を、確率で表わすことのできる検査用紙を作成することにある。

#### c 検査用紙の作成

いくつかの性格特性をあげ、これらの特性を捉えるための質問紙を構成するのではなく、第1年度および第2年度に用いた諸種の検査で、非行の弁別に役立つ問いを集めて、非行傾向児の早期発見に効率のよい質問紙を作成するのが目的である。したがって、ここに、これらの問いをどのように組合せたら、先の目的をもった質問紙ができるかという問題がある。

まず一方の軸に環境への適応、自己統制、情緒性を、他の軸に個人、家庭、学校、社会をとって枠組を行ない、次いでこの枠に先の問いを位置づけることにした。その結果は、情緒性の領域に含まれる問いの数が少なく、情緒性を1つの領域として止めておくことには、無理があると思われたので、これを廃した。その代り、こ

れに、どの領域にも位置づけられず、しかも非行を弁別する力のある問いを加えた。この問いの1団を“その他”と呼ぶことにした。他の軸では、環境、環境への適応の領域は、問いの配分に均衡を保てたが、他の領域では、不均衡とならざるを得なかったので、これにこだわらないことにした。

このように編成した結果、環境、環境への適応、その他の3領域には各20問、自己統制には25問が配置され、全体では85問となった。

第3は林博士の数量化を適用するためには、定性的なサブ・カテゴリーの数が4つ以上とされていることから、ここに取り入れた問いへの反応を4つにすることであるしかるに問題行動診断テストと家庭環境診断テスト以外は、反応が“はい・いいえ”または“はい・いいえ・?”である。そこでこれら問題を問題行動診断テストにならって問いに対する答えを4つの選択肢によって行なわせることにした。

#### d 非行群と正常群にあらわれた反応の差異

##### (1)、非行群と正常群の設定

グリユック夫妻および林博士の数量化は、共に問いの反応に対する非行群と正常群の度数分布を基としている。

そこで福島、郡山、須賀川、会津若松、磐城、内郷市内から11の中学校を選び、その学校の第2学年の生徒をもって、非行群と正常群を設定することにした。

各学校とも在籍者の1割程度の数だけ、非行または非行化の程度に従って順位づけた名簿を持ち寄り、学校相互にその実状を話し合った上で、非行群として200名を決定した。この数は在籍者の5.03%に当るものである。正常群にはその学校の非行群に属する生徒の数だけ、正常の生徒の中から無作為に抽出してこれに当てることにした。

##### (2) $\chi^2$ -検定

上記の非行群と正常群に研究所の性格検査を行ない、両群の各問への反応の差異を $\chi^2$ -検定によってたしかめた。各問の $\chi^2$ の値は1表にみられるごとく、1%の危険率で差異の認められないものは僅かに7である。従って著しく有意差の認められた問いは78で、全体の89.4%にあたる。これを34年度の牛島義友著の性格検査の37.5%、問題行動診断テストの58.0%に比らべると相当に大きな数であることが判る。